

聖書 ダニエル書6章10～23節、ルカ福音書7章1～10節

ルカ福音書7章1～10節から学びたいと思います。7章全体の概略をみてみます。イエスは6章の最後のところで、岩の上に建てた家の譬えを語ります。それは、御言葉を聞いて、それを実行する者は岩の上に建てた家のようなものであり、洪水が来てもびくともしないということをイエスは話されたのでした。そして、7章全体のテーマとして「御言葉を受け入れる者」について語っていくのです。

6章でイエスは、手の萎えた人に対して「手を伸ばしなさい」と呼びかけ、敵を愛せない私たちに対して「敵を愛しなさい」と語りかけてくださったのです。このような御言葉を聞いても、なかなか実行できない私たちですが、イエスの御言葉ですから行ってみましょう、という促しが与えられたのです。そして6章の最後で、イエスは岩の上に建てた家の譬えを話されたのでした。

御言葉を聞いて、それを実行する者は、岩の上に家を建てたようなものであり、洪水が来ても、びくともしないという譬えを話されたのです。そして、次の7章1～10節では、神の御言葉を聞いた者はその御言葉に謙虚でなければならぬということが、百人隊長の僕を癒す物語で明らかにされていくのです。

ここに登場する百人隊長は謙虚な人物です。イエスに自分の部下の病をいやしてもらいたいのですが、自分がユダヤ人を抑圧するローマ帝国の手先であることを十分承知しているのです、自分と親しいユダヤ教の長老たちに頼んで間接的に癒してもらいたい旨を申し出ています4～5節を読んでも『百人隊長は、そうしていただくのにふさわしい人です。私たちユダヤ人を愛して、自ら会堂を建ててくれたのです』と語られているように、ユダヤ人に対して親切な人物であることが間接的に証言されます。

この百人隊長の頼みをイエスは聞き入れて当然な人物であるということです。ただ、百人隊長が御言葉に対してへりくだった人物であることは、イエス一行が百人隊長の家近くに来た際に、この百人隊長がわざわざ友達をイエスのもとへ遣わして、自分はイエスを自分の家に招き入れるにふさわしい人間ではないと伝えていることでも周知徹底されているのです。

イエスに自分の部下の病を癒してもらうために依頼をしておきながら、自分の家に招き入れることができないというのは矛盾した行動なのですが、ここでルカ福音書記者が強調したいことは、御言葉を聞き入れて実行する者は、御言葉に対してへりくだった者でなければならぬという信仰者の姿が百人隊長の発言と行動に如実に表されているのです。

ですから、次の11～17節の「やもめの息子を生き返らせる」物語では、イエスが「若者よ、あなたに言う。起きなさい」と言うと、死人であるにもかかわらず、起

き上がった、イエスの御言葉の力が証明されるのです。イエスが発する言葉は、神の御言葉そのものであるのです、このイエスの言葉の力がここでも強調されているのです。

百人隊長はローマ軍の指揮官であり、ローマ皇帝の権威の下に置かれている人物なので、皇帝の命令に従順に従う人物であることが百人隊長自身の口から語られています。8節で『わたしも権威の下に置かれている者』であり、自分がローマ皇帝の権威の代理人であるので、『わたしの下には兵隊がおり、一人に「行け」と言えば行きますし、他の一人に「来い」と言えば来ます。また部下に「これをしろ」と言えば、そのとおりにします』という百人隊長の発言にイエスが感心し、9節で『イスラエルの中でさえ、わたしはこれほどの信仰を見たことがない』とイエスが発言していることを見ても、本日の個所が強調していることは、御言葉の権威に対して謙虚であることが強調されていることがわかります。

私たち信仰者は、互いに愛し合いなさいというイエスの御言葉を大切な掟を理解していても、自分の狭い認識力によって、簡単に敵を作り、敵への憎しみを生きたるエネルギーに転換させてしまいますし、神から与えられている愛を基にして対人関係を築くことが苦手な存在です。御言葉が持っている恵みのすばらしさを頭では理解しているつもりですが、実際の現実生活では御言葉が持つ恵みを使い分けて、ダブルスタンダードの価値基準で生きているところがあります。

最近、岸田首相が遊説中にテロに襲われましたが、その実行犯の青年が国を相手取り、被選挙権の年齢制限は憲法違反だという訴訟を起こしていた事実が報道されました。その報道に接して改めて、25歳以上でなければ被選挙権がないというのは18歳以上の投票権と矛盾していることに気づかされましたし、選挙に出るためには40万円の供託金が必要だということも、実際に普通の人が選挙に立候補できないシステムになっているということも考えさせられました。もちろん、テロ行為はやってはいけないことですが、閉塞状況に置かれた若者に、当たり前だと思っていたことに実は問題点があることに気づかされた気がしました。

私たちは現実の世界が矛盾をはらんでいることに気づかないで、現実に対して肯定的に接していく中で、神の意思を實踐することから遠く自分自身を隔ててしまい、神の意思を實現していく器としての活動をないがしろにしているところがあるのに、それに気づかない素振りをしているところがあるのではないかと考えさせられます。

神の恵みを頭では理解していても、現実の世界ではダブルスタンダードで対処しているところがあるのではないかと思わされます。何も、聖書の御言葉を一字一句正確に体現しなければならぬと言っているのではないのですが、御言葉を受容していくことの難しさを改めて考えさせられます。この難しさのなかに私たちの生き生きとした信仰生活が息吹くのではないかと思わされます。